

本書の初版が出版されたのは1997年であ  
れた。今までの序文を読み返しても、この、それから  
変化があったが、この数年の社会を根底から変え、  
強烈であった。第1は、新型コロナウィルスに  
あつた。わが国では2020年2月から流行ルスの世界  
という二律背反を喧伝され、結局、両方とも始まり、「  
を抑え込みつつ、経済成長を果たした国も失ったよう  
ながらコロナ敗戦国と言っている。あるなかで、  
学は、新型コロナウィルスに對するすなわち、  
で治療薬、このいすの開発においても、診断試薬、  
なつた。さらに科学の劣化のみならず、後れをとつた  
うとし、ICT(情報通信技術)はもつてい臨床試験とい  
れていくことが全くなかつた。また、それを、  
立国という理念から離れていったことがわが国がよ  
う。コロナ敗戦の、大きな原因と思

四半世紀前、20世紀の終り頃の世界は  
でいた。「失われた10年」が今や「失われた、バブル崩  
ナ敗戦を踏まえ、いまいまだ世界をリード30年」とさ  
きと考える。創業などでは後れをとつたも科学立国を復興させるべ  
準は極めて高いレベルにある。少子高齢化の、幸い  
て直すくらしいの概観で、ポストコロナの機会を見据え、  
第2の衝撃は、2022年2月に始まったウ代を創生す  
弾の使用可能性など重大な危機をはらみなクライナの戦争である。核爆  
国内においても「アラート」といふいわば空から、今も戦  
た。われわれの価値観も再構築を余儀なく襲撃報が鳴り響く時代になつ  
だ、何とかしなくては、でも最初は目の前をさされている。「大変な世の中  
ずは臨床検査医学のさらなる発展に資することから」といふ思いで、ま  
最後に、初版からずっと本書の監修をしてにした。  
2022年3月に逝去された。心からご冥福をいたした。高久史磨先生が、  
にわたり多くの指導をいただいた。ありがとうございます。私の恩師であり、公私  
2023年1月

2021-2022 年版/編集者の序

2020 年は、全世界が、COVID-19 の感染拡大に  
けた年として忘れることのできない年となつてし  
国武漢市における原因不明の重症肺炎として報  
あるが、わが国でも 1 月中旬に 12 例の感染者が確定  
間にその感染が拡大し、11 月の時点では 10 万人  
人以上の方が命を落とされ、外出を控え、3 密（密閉  
防止の観点から不要不急の外出を控え、3 密（密閉  
ることが推奨され、我々の生活様式が大きく変化し  
それに加えて、感染のリスクと向きあいながら医療  
う非常にストレスフルな日々が続いており、残念な  
の事例も多く報告されている。  
このような状況は当然、本書の改訂にも影響を  
19, SARS-CoV-2 についてそれぞれ執筆いただき、  
情報の更新に努めた。それに加えて、検体採取時の  
ども、COVID-19 を念頭に、おいた記載に変更され  
論に「特定背景のある患者」、すなわち肝・腎機能即  
視野に入れた加害を行ったほか、新規保険収載され  
子パネル検査を含め、本書に取り上げている。疾患  
とすべき国内の診療ガイドライン名を紹介し、皮膚  
齢者疾患も拡充した。以上のように、今回も各種の  
臨床検査の現場に資するものを目指した。

本書は 1997 年の初版以来、高久史磨先生の監修  
村聖先生と私の 3 人で 33 年間編集を担当してきた  
学医学部の大西玄明先生にも編集協力として加わつて  
た。本書が、読者の皆様に必要な情報を的確にそし  
書物として、今後も進化し続けるためにも大西先生  
たい。

2021 年 1 月

日本では医療費の大部分は公費と公的保険だが、例えば 80 歳超の人には、1 人に毎年 80 万円〜100 万円という医療費がかかっている。この問題を踏まえてどのような社会を構築していくのだろうか、さらに少子高齢社会で問題になるのは認知症であり、その対策は待たなしたが、医療は認知症患者の人間性を保ち続けるために、解決策をどこまで提示できるだろう。本当に頭の痛い問題だ。

もう一つの問題はグローバルな課題であり、新興感染症や薬剤抵抗性細菌などの広がりについて備えていなければならない。エボラ出血熱などのようなものは国境を越えてどこにでも来る。これに対する経済先進国の援助は喫緊の問題である。加えて、多くの途上国が経済成長を始めており（経済先進国で中間層が伸び悩んでいるりと対照的ではないが）、肥満、糖尿病なども増加し、健康教育のニーズもでてきた。国家の優先事項への配分が問われている。

急速に変化する世界にあつて、この臨床検査の教科書はどのような使い方をされるのだろうか、お役に立つのだろうか、従来からの医療提供制度の枠組みで役に立つのか、これからのあり方にも役に立つのだろうか。女性参画まだし、女子高齢社会のさらなる進展、公的債務が GDP の 200% を超える、広がる経済格差などを抱えるこの日本、そこでの医師のキャリア、医療人のキャリアを考えると、デジタル技術の急速な進歩で何が起ころのか、想像するだけでも、ワクワクするのか、ドキドキするのか、暗い気持ちになるのか、何か大きな変革が医師・医療人のキャリアの選択にも大きな影響があることだけは間違いないだろう。

若い人たちへ、広い世界へ出てみよう、何かをこつているかを実感しよう、そこから見える日本をどう感じるだろうか、そして、日本へ何ができるだろうか、考え、行動してほしい。これが私の本心からの気持ちなのだ。日本のなかにいるだけでは見えない、感じられないことがたくさんあるのだよ。

2019 年 1 月

黒川 清

## 初版(1997-1998 年版)/監修者の序

今回医学書院から出版される『臨床検査データブック 監修をお引き受けることになった。本書は「総論」各論」、「疾患と検査」の 3 部門に分かれている。当然を超える検査項目を網羅した「検査各論」であるが、「疾患と検査」と題して第 3 部で 270 を超える疾患をあげられる。

まず「検査各論」では各検査項目の基準値、測定法数などの基本的な数値に引き続いて、検査結果の異常に考えられる様々な疾患を高頻度、可能性の別に記載する対策が簡潔に述べられている。また別項目として、ニズムとその臨床的意義が比較的詳しく述べられておるを判読する上で注意すべき点、検体の採取および保存用の検査値への影響、検査上の注意が必要に応じて述次の「疾患と検査」では、各疾患の病態をまず簡単に検査の異常、経過観察のための検査項目と測定頻度が記載され、最後に診断・経過観察上のポイントが述べ近代医学における疾患の診断に際して、臨床検査が演じていることと、今更言うまでもないことであるが患者の診断について考えた場合、2 つのアプローチがあり、1 つは患者の訴えや臨床病状から特定の疾患を推定を行い、診断の確定、更に疾患の重症度の判定に至る。逆に検査値の異常をそのいずれのアプローチにも対応できるように工夫し、疾患に関する記述も簡明であるが、反面異常値がその臨床的意義や、診断・経過観察上のポイントのようについてはかなり詳しく述べられていることも本書の大きな特徴として上記の要請に応じた記述をされた執筆者の方々にこの場を謝意を表したい。

1997 年 3 月



初版(1997-1998 年版)／編集者の序

序

臨床検査の項目はどんどん増えてきた。また役に立っているのだから、診断、経過観察に欠かせない大要に強力な武器である。しかし、どこまで検査をすれば十分なのか、あるいは入院患者にまず問診をしながら、質問を行い、次に身体所見ととりながら、鑑別診断を進め、さらに診断を考える。そこで、80～90年代の頃、診断は進め、さらに検査項目としては何をオーダーするかが一般的であろう。その理由は何も考えずにオーダーしてしまっただけか、期待される結果はどうか、このように「考える」検査オーダーのプロセスは、大学病院を含む教育研修病院でさえもこの頃に行われていたのではない。大学病院を卒業した医師が、この検査の理由に教え、考えるべきではないか、何か必要な検査で、何か無駄な検査ではないか、その根拠はどこにあるのか、などをもつて、検査にもブライオリテイがある。検査をオーダーし、その結果が戻ってきたから考えるという医師が多くなっている。「血尿、蛋白尿」があっても尿の比重や尿のpHなどを見ない、熱があるから、とにかく検査をしましょう、などとは誰も聞かない。心配なこと、患者の病態が心配なことではない。医師が自信がないか、心配なのだろうか。

このような傾向になったのは、医療費の払戻率、中央検査費の発達、医療器具の発達、臨床教育が貧しくなり、検査依存度が高くなった。「New England Journal of Medicine」に毎月1回出ている「Clinical Problem Solving」は医者の臨床での思考の流れが示されていて、臨床の醍醐味とも言える。そして、この本では検査の結果をどう考えるかがわかりやすくて、臨床の醍醐味であり、医師としての腕の見せ所であろう。本書をお読みいただき、なぜ、その検査をオーダーするのか、まず考えることから始めるのが昔も今も変わらぬ臨床の基盤であり、医師の基本であることを忘れてはならない。

1997年3月

執筆者一覧(五十音順)

吉沼 和隆	大阪府立総合医療センター 一般内科(前職)	磯谷 周治	順天堂大学大学院准教授・泌尿器外科学
明 白 竜 子	東京大学医学部付属病院・泌尿器科	井田 陽子	杏林大学医学部付属病院・臨床検査部
秋山 雄次	岡山大学医学部・泌尿器科(前職)	伊豆津宏二	国立がん研究センター中部病院・血液腫瘍科長
浅川 明弘	群馬大学医学部教授・泌尿器科	伊藤 裕	慶應義塾大学教授・腎臓内科・泌尿器科
片岡 昌一	大阪府立総合医療センター・泌尿器科(前職)	乾 明夫	鹿児島大学南方薬理学特任教授
大谷 雅行	慶應義塾大学教授・泌尿器科	今井 浩三	札幌しらかば台病院・泌尿器科研究センター所長・札幌医科大学名誉教授
後部 琢哉	東京大学医学部教授・泌尿器科	今井 裕一	多治見市民病院院長
荒岡 秀樹	慶応義塾大学医学部・泌尿器科	今井 幸紀	埼玉医科大学准教授・消化器内科・肝臓内科
荒木 厚	東京医科歯科大学教授・泌尿器科	今西 健一	日本保健医療大学特任教授
荒木 拓也	群馬大学医学部准教授・泌尿器科	岩佐 武	徳島大学大学院教授・産科婦人科学分野
荒木 清人	岡山大学医学部教授・泌尿器科	岩瀬 明	群馬大学大学院教授・産科婦人科学
白木 純	大阪府立総合医療センター・泌尿器科	植木 浩二郎	国立国際医療研究センター・腎臓病研究センター長
安藤 雄一	大阪府立総合医療センター・泌尿器科		
阪高 誠	大阪府立総合医療センター・泌尿器科	上原 由紀	福山医科大学臨床教授・泌尿器科
阪塚 誠	東京大学医学部教授・泌尿器科	内田 義人	埼玉医科大学・消化器内科・肝臓内科
家田 健史	東京大学医学部教授・泌尿器科	打矢 敏	埼玉医科大学・消化器内科・肝臓内科
伊賀 立三	東京大学医学部教授・泌尿器科	海老原明典	東海大学医学部付属東京病院教授・呼吸器内科
伊藤 裕二	東京大学医学部教授・泌尿器科	大谷 諒一	慶應義塾大学医学部教授・慶應義塾大学病院薬理部長
池田 哲郎	岡山大学医学部教授・泌尿器科	大西 宏明	杏林大学医学部教授・臨床検査学講座
池森 敦子	東京大学医学部教授・泌尿器科	大濱 佑季	東京大学医学部附属病院感染制御部・国立感染症研究所副部長
石井 彰	東京大学医学部教授・泌尿器科	大原 毅	兵庫東立ほりま郡総合内科検査センター副院長・内分科部長
石井 恵子	東京大学医学部教授・泌尿器科		
白黒 洋	岡山大学医学部教授・泌尿器科		
白黒 寛之	岡山大学医学部教授・泌尿器科	岡田 輝明	結核予防会榎十子病院病理科診断部・部長

岡里 尾崎 小里 甲斐 甲斐

加治

梶

梶山

春日

鹿住

倉片

瀉永

片山

100

加藤

11

加藤

金十

船一

電子

全

三上

川上河野

河田 祐田

姓名 日期

日 本 村

北村

11

12 執筆者一覧

一部附属病院・感染症制御部  
准教授・消化器内科・肝臓  
大学院医学系研究科特任教  
授・内科学  
一部附属病院・感染症制御部  
主任教授・内科学（血液・

中島 淳 横浜国立大学主任教授・医学研究科肝臓・消化器病学  
永田 正男 ふくやま病院内科  
永田 政義 順天堂大学大学院准教授・泌尿器外科学  
中村 聡 順天堂大学大学院・泌尿器科学  
中山 伸朗 埼玉医科大学准教授・消化器内科・肝臓内科  
西原カズミ 前日本通運東京病院・腎臓科部長  
野田 裕道 NTT 東日本伊豆病院・呼吸器科部長  
橋口 照人 鹿児島大学大学院教授・血管代謝病理解析学分野

廣田 勇士 神戸大学大学院・内分  
廣村 桂樹 群馬大学大  
深川 雅史 東海大学教  
福本 誠二 徳島大学特  
藤井多久磨 藤田医科大学  
藤井 庸平 埼玉医科大学  
藤澤 康弘 愛媛大学教  
藤田行代志 群馬県立病院医学研究科准教授・糖尿

橋本 直明 東都春日部病院・副院長  
橋本 佳明 人間ハート病院内科  
長谷川 浩 杏林大学医学部教授・総合医科学  
長谷川 裕 はせかわ内科クリニック院長  
畑中 裕己 帝京大学准教授・神経内科  
林 秀幸 慶應義塾大学特任講師・腫瘍センター  
林 松彦 ゲノム医療ユニット  
林 哲 河北総合病院・臨床教育・研修部部長  
林田 哲 慶應義塾大学・一般・消化器内科専任講師  
日暮 芳己 東京大学医学部附属病院・感染制御部  
久田 剛志 群馬大学大学院保健学研究科教授  
久田 哲哉 世田谷通り脳内科クリニック院長  
菱田 明 浜松医科大学名誉教授  
人見 重美 筑波大学大学院教授・医学部腫瘍系感染症科  
日野田裕治 札幌しらかば病院顧問  
平井 由見 東京医科大学八王子医療センター感染

古川 恵一 順天堂大学・腎内分  
堀江 重郎 順天堂大学  
堀田 晶子 東京大学大  
藤本文恵 東京大学医科学部門  
舟久保ゆう 埼玉医科大学教授・腎臓・リウマチ内  
古川 恵一 国保旭中  
堀江 重郎 順天堂大学  
堀田 晶子 東京大学大  
床実智 教授主任教授・産婦人科学  
浜松医科大学・消化器内科・肝臓内科  
神戸大学医学・皮膚科学  
地方独立行政センター薬剤部・薬剤部長  
阪国国際がんセンター附属病院・感染症制御部  
埼玉医科大学教授・リウマチ膠原病科  
奈良県立医科大学附属  
京都桂病院・大学院教授・泌尿器外科学  
東京大学医学部医学系研究科・医学部腫瘍医科学支援室（腎臓・内分  
埼玉医科大学

平田 喜裕 東京大学医科学研究所准教授・先端ゲノム医学分野  
平井 由見 東京医科大学八王子医療センター感染  
日野田裕治 札幌しらかば病院顧問  
人見 重美 筑波大学大学院教授・医学部腫瘍系感染症科  
菱田 明 浜松医科大学名誉教授  
久田 哲哉 世田谷通り脳内科クリニック院長  
久田 剛志 群馬大学大学院保健学研究科教授  
林田 哲 慶應義塾大学・一般・消化器内科専任講師  
林 松彦 河北総合病院・臨床教育・研修部部長  
林 哲 慶應義塾大学・腫瘍学  
橋本 佳明 人間ハート病院内科  
橋本 直明 東都春日部病院・副院長  
長谷川 裕 はせかわ内科クリニック院長  
長谷川 浩 杏林大学医学部教授・総合医科学  
畑中 裕己 帝京大学准教授・神経内科  
林 秀幸 慶應義塾大学特任講師・腫瘍センター  
林 松彦 ゲノム医療ユニット  
林 哲 河北総合病院・臨床教育・研修部部長  
林田 哲 慶應義塾大学・一般・消化器内科専任講師  
日暮 芳己 東京大学医学部附属病院・感染制御部  
久田 剛志 群馬大学大学院保健学研究科教授  
久田 哲哉 世田谷通り脳内科クリニック院長  
菱田 明 浜松医科大学名誉教授  
人見 重美 筑波大学大学院教授・医学部腫瘍系感染症科  
日野田裕治 札幌しらかば病院顧問  
平井 由見 東京医科大学八王子医療センター感染  
平田 喜裕 東京大学医科学研究所准教授・先端ゲノム医学分野

水野 正司 名古屋大学・一部附属病院教授・医療情報部  
清口美祐紀 東京大学医科学センター 総長  
三谷 絹子 徳島医科大学講師・耳鼻咽喉科（腫瘍）  
埼玉大学教授・輸血部  
膠原病リウマチ科部長

13 執筆者一覧

三橋 知明 埼玉医科大学客員教授・臨床検査  
南嶋 洋一 宮崎大学名誉教授  
峰松 俊夫 愛泉会日南病院・疾病制御研究  
三村 俊英 埼玉医科大学教授・リウマチ膠原病科  
三宅 一徳 順天堂大学教授・医療科学部臨床検査学  
宮田 哲 鶴岡病・代謝内科 宮田クリニック  
宮田 敏男 東北大学大学院教授・医学系研究科  
宮本 勝一 和歌山県立医科大学准教授・臨床検査学  
村上 晶 順天堂大学大学院特任教授・眼科  
持田 智 埼玉医科大学教授・消化器内科  
森 兼啓太 山形大学医学部附属病院検査部長  
森屋 恭爾 東京大学保健・健康推進本部・保健学  
八島 秀明 群馬大学大学院・臨床薬理学  
安井 寛 聖マリアンナ医科大学特任准教授  
安田 隆 吉祥寺あさひ病院副院長

安田 尚史 神戸大学大学院教授・保健学研究科  
柳原 克紀 長崎大学大学院教授・臨床検査医学  
矢野 晴美 国際医療福祉大学医学部医学教育統括センター・感染症学教授  
山口 英世 帝京大学名誉教授  
山口 芳裕 杏林大学教授・医学部救急医学  
山口 諒 東京大学医学部附属病院薬剤部  
山本 一彦 理化学研究所生命医科学研究センター・セクター長  
山本 康次郎 群馬大学大学院教授・臨床薬理学  
温泉水真由 がん研究会有明病院婦人科副部長  
尹 聖哲 兵庫県立加古川医療センター副院長  
横田 和浩 埼玉医科大学准教授・リウマチ膠原病科  
横田 浩亮 慶應義塾大学病院臨床検査技術室・室長  
吉田 佳弘 日本赤十字社小川赤十字病院リウマチ科部長  
四柳 宏 東京大学医学部研究科准教授・先端医療研究センター感染症分野  
米谷 正太 杏林大学・保健学部臨床検査技術学科  
和田 琢 埼玉医科大学リウマチ膠原病科

臨床検査

いて、総

検査計

本章で

の進め方

基本検査

自ら実施

検査各

必要を

知ってお

疾患と

約 300

まとめな

付録

臨床検査

(JCCLS

日本語部

表紙側)

凡例 1

検査項目

《同義

英語表

★★★

標準

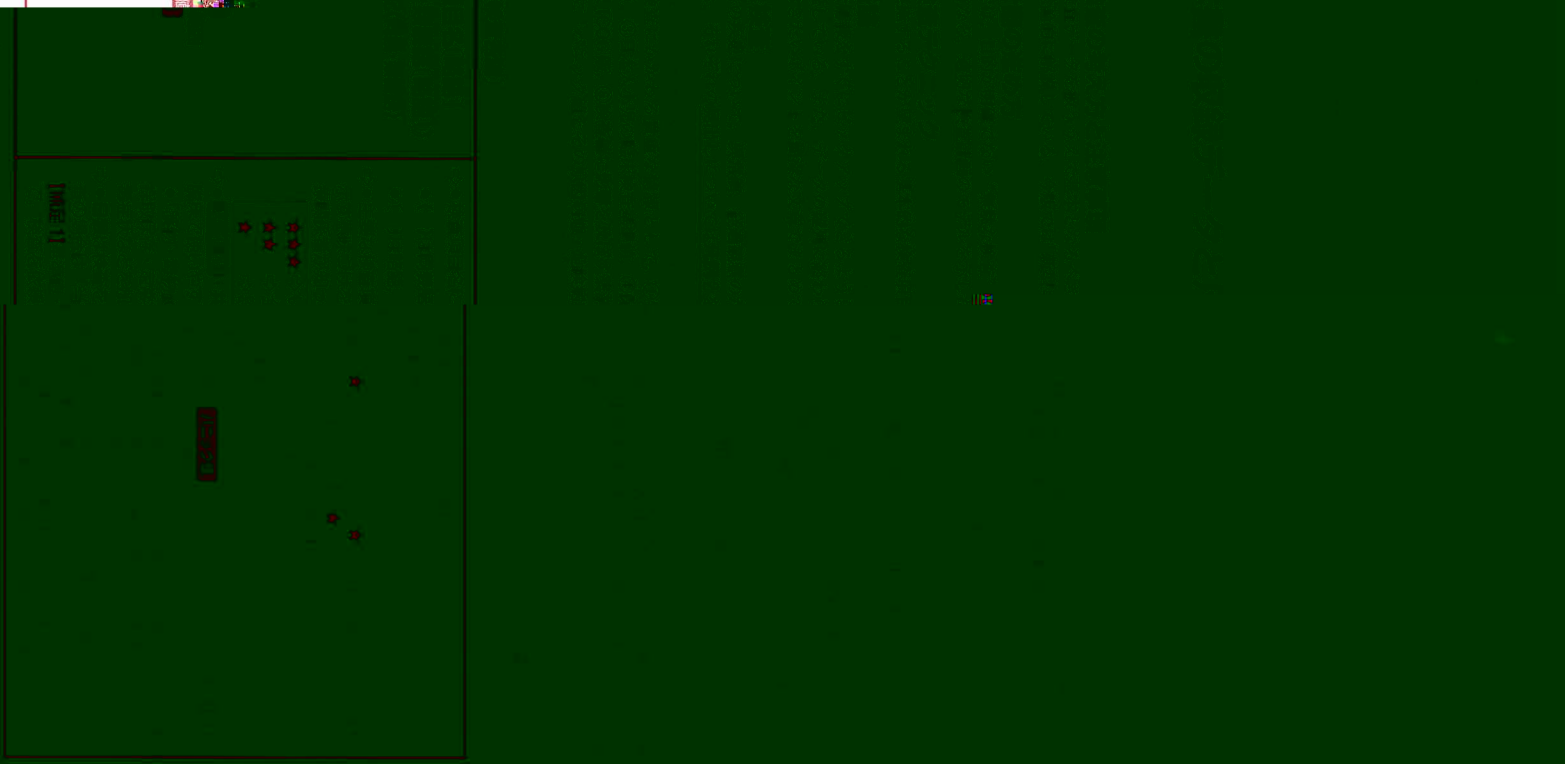
共用基準

測定法

検体量

日数

目的



図表 11